

今年で7回目の開催となる「長崎街道ひなまつり」は、旧長崎街道沿い5施設連携による、おひな様やそれに関連する展示イベントです。5施設それぞれが違った趣を醸し出し、ひなまつりだけでなく、長崎街道の歴史も併せて楽しむことができます。イベントです。町歩きをしながらひなまつりを楽しんでみてはいかがでしょうか。

【北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館】
○期間 2月9日(土)～3月31日(日)
みちの郷土史料館企画展示室にて、ひな人形やひな道具の紹介、手作りのさげもん(吊るし飾り)の展示をはじめ、女の子の節句ということにちなみ、江戸時代の女性の装飾品に関する展示も行っています。また、直方市を代表する俳人・阿部王樹が、直筆の絵をあしらった嫁入り道具として娘に贈った着物の帯を展示しています。



木屋瀬宿記念館のおひなさま

【立場茶屋銀杏屋】
○期間 2月17日(日)～3月17日(日)
「大名雛」と呼ばれる手作りの巨大雛や、色とりどりのさげもん、書院造の間に飾り付けられ、表には可愛らしい竹びなが並びます。3月1日～3日の間には、来館者に甘酒やひなあられをふるまうイベントを行います。

総合問い合わせ先
長崎街道
木屋瀬宿記念館
093
619-1149

【木屋瀬時代の散歩道 報告】
今回で16回目となりました講座「木屋瀬時代の散歩道」9月14日(金)～10月20日(金)の毎週金曜日、全5回にわたり開催し、52名の方が受講されました。
明治維新150周年にあたる中、木屋瀬を歩き来た幕末の志士のお話や、意外と知られていない木屋瀬の歴史と人の紹介。さらには、ケンペルやシーボルトなどの人物の旅行記から見た木屋瀬、豊臣秀吉ゆかりの太閤道のお話、木屋瀬町並み研修など、様々な角度から木屋瀬や長崎街道についての知識と理解を深め、木屋瀬の魅力を再発見していただける講座になりました。皆さまのご参加、誠にありがとうございました。また、講師の先生、さまざまな案内ボランティアの皆さま、ご協力に心から感謝申し上げます。

木屋瀬宿記念館 広報部 徳永 興紀



長崎街道ひなまつり

「木屋瀬宿」
立場茶屋銀杏屋開催中!



北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

【旧高崎家住宅(伊馬春部生家)】
○期間 2月11日(月・祝)～3月31日(日)
江戸時代末期の宿場建築の様相を色濃く残す屋敷の中に23台、約50体のひな人形が展示され、趣ある建物と併せて来館者を楽しませます。



もやいの家のおひなさま

【江戸あかりの民藝館】
○期間 2月17日(日)～3月31日(日)
館長である佐藤伸一氏が収集された、江戸時代の大名家や武家由来のひな道具を展示しています。当時の道具職人たちが、道具を模して作った精巧なひな道具の数々をお楽しみください。

筑前木屋瀬 第5回 今昔歳時記

紅屋泰助氏(故 柴田泰助氏)の「筑前木屋瀬今昔歳時記」の第5回目です。今回は、六月の行事・風物について後編をご紹介します。

【筑前木屋瀬祇園祭】

この山笠につき、特筆すべき二点を紹介させていただきます。まず、一点目は、宿驛往時からの伝統である山笠当番町制度です。[筑前木屋瀬祇園祭]の全般の仕切りは須賀神社氏子総代会で組織する実行委員会が執り行います。しかし、祇園二日間に亘る山笠の運営に関しては、二基の山笠(赤山笠と青山笠)の当番町に委ねられます。赤山笠は本町六町の山笠ですから六年に一度、青山笠は新町七町の山笠ですから七年に一度、当番町が輪番制で巡って来ます。山笠当番町になると、山笠の運行責任及び山笠関係者(双方とも百五十人以上)の二日間に亘る昼食・夕食のほか、休憩時の飲食接待も受け持ちます。当番町になるのは、百世帯以上ある町内から三十世帯未満の町内まで様々です。しかし、各町内はそれぞれの誇りと威信をかけ、栄えある山笠当番町を務める習いでございます。

第二点目は、地域住民による[手作り人形山笠]でございます。山笠は元々住民の手作りでした。それが、何時の頃からか人形師に飾り付けを依頼するようになり、久しく続いていました。しかし、木屋瀬の山笠の動きが荒くて人形飾りが激しく損傷する事、借り物の人形飾りでは雨天時の運行に支障を来す事などが問題となりました。其の解決策として、さらには[手作り人形山笠]の制作に参加することで、より多くの住民に親しんで戴き、祇園を盛り上げる事を趣旨として、取り組んで居るものです。平成十七年、木屋瀬のシンボルであり住民の誇りでもある山笠会館が完成しました。以来、老いも若きも多くの住民が[筑前木屋瀬祇園祭]に参加。其の熱き思いから為る[手作り人形山笠]は雨が降ろうが風が吹こうが、例え台風が来襲するとも元気一杯に町中を曳き回し、初日の奉納、二日目の宮入り行事を恙無く執り行っているでございます。以上の如き[筑前木屋瀬祇園祭]の執行準備の為、六月の木屋瀬は日を追う毎に熱く慌ただしく過ぎて行き、祇園月の七月を迎えるのでございます。

つづく (記念館)

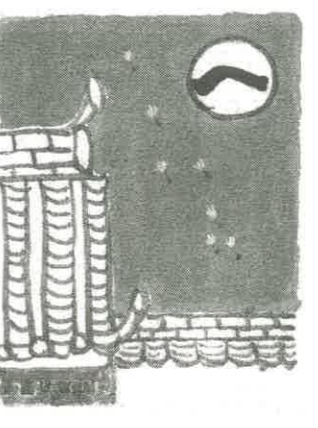
いろはかるたのご紹介

ほんまち さんちよう あか はた
【ほ】 本町 三町 紅の幡



宿驛往時、木屋瀬は本町三町と新町三町の計六町で形成されており、本町三町とは、本町・中町・下町のことでございます。(江戸末期に新地が加わり本町四町となる)
尚、札に描かれた幡は本町三町「子供あびす行事」の幟幡でございます。

へい しろ さいがんじ
【へ】 塀の 白いは 西元寺



浄土真宗西本願寺派・白髪山・西元寺の山門から連なる白漆喰塗りの築地塀は、昔から祇園町通りの風物でございます。因みに祇園町通りとは現在の須賀神社(古くは祇園社)の参道でございます。

シリーズ 筑前木屋瀬宿神仏めぐり

第四十五回 大義山永源寺 晋山式

平成三十年十月二十一日 永源寺第二十二世秀教和尚が退任され、大義山永源寺 第二十三世康尚和尚の晋山式が執り行われました。晋山式とは新しい住職がお寺に入る儀式のことです。

永源寺は、山号を大義山と称します。山号というのは、仏教が盛んであった中国では、山中にお寺があり山の名称でお寺を呼ぶ習わしがあり、その影響で日本でも始めは山中に寺を建て山の名称で呼んでおりましたが、その後平地でも寺に山の名称を付けるようになり、山号が付くようになりました。「晋」は、進むとも読みます。晋山式とは、山に進みお寺に入る、新任職就任の儀式の事です。新しい住職を新命和尚と呼びます。当日は、新命和尚は下町の井上家を「安下処」としてそこから、五人の侍者(新命和尚を世話する僧侶)と檀信徒、更には稚児行列を共に永源寺へと向かわれました。山門で新命和尚が決意表明の法語を述べられ本堂へと上殿されました。本堂にて、住職辞令の伝達が行われ新命和尚は、ご本尊様、土地堂、祠堂、開山堂に、それぞれ御参りし、感謝の挨拶と法語を述べられ、一旦退堂されました。その後、新命和尚としての力量や器の大きさ、智慧などを試される大問答が行われ、新命和尚が僧侶や檀信徒に禅の教えの深さなどを示されました。その後、新命和尚の最初の弟子である首座(宏紀和尚)の、僧侶として修業の一つ



井上家より永源寺へ向かう康尚和尚

「首座法戦式」が行われ、禅の修業や悟りについでに問答が交わされ、無事に僧侶として宏紀和尚は皆様から認められました。新命康尚和尚は、昭和四十八年生まれの今年四十五歳であります。地元の木屋瀬小学校、中学、市内の県立高校から、駒沢大学仏教学部へと進学し卒業され、その後四年間、東京でサラリーマン生活を経験され永源寺へと帰られました。その後、平成十五年から大本山永平寺に上山され、多くの修業僧が半年から一年で山を降りられるところを、三年間厳しい修業をされ帰郷されました。晋山式には、本寺の安国寺御住職、大本山永平寺御専使、大本山総持寺御専使や法友、法類の六十数名の僧侶、檀信徒など約四百数十名の方々が参加され厳かに執り行われました。晋山式の最後に新命康尚和尚は、人々の幸せと信仰の輪が広がって行く事を願われ、又、永源寺新任職としてお寺を守つてゆく覚悟を述べられ晋山式が無事に終了いたしました。晋山式が無事に終了いたしました。人の一生でなかなか会うことが出来ない大事な事業の法縁に接することが出来大きな喜びを頂きました。



永源寺第二十三世康尚和尚

天高し晋山式の禅問答 後の月地藏と語る大銀杏

宿場木屋瀬街づくりの会 会長 野口靖彦



永源寺山門での稚児との記念写真

史跡 構口(一)

木屋瀬宿は、筑前内宿街道の分岐点で、人馬や物品の交流が盛んに行われ、賑わっていた。三代將軍家光の時代、参勤交代制が確立し、二百余の諸大名が年々江戸と領国との間を往来するようになった。木屋瀬も九州諸大名の往来に緊張の度合いが高まったが、街の経済は潤って来た。宿場入口を守っていた構口が感田町に残っている、長崎街道と内宿街道を利用するものは必ず通っていた、構口である。この東隣りに「てんや」があった、旅人達の憩いの場であり、ここで道連れが出来る人や、ここで長い道連れとお別れする人達の旅人情の集いの場でもあった。構口の昔々を考えてみた。殿様や奥方や姫様の駕籠の行列や雲助達の山駕籠野野籠、御朱印付の本馬や伝馬、通し飛脚や継飛脚、伊勢や熊野詣りの団体大旅行等々が、次々に浮



わたしの昔話

かんで来る。構口はこうした数限りない諸々の働きを見極めながら長い歲月宿場を守っていたものだが、今では東西の主門の役目を持つ部分の大部分を石積を残すだけの、淋しい裸姿となっている。これに続く袖屏の基礎石が、御庚申様まで続いていた東側も袖屏の部分は竹藪に吸収されて

らば想像も出来ない。木屋瀬の貴重な文化遺産である構口の残念な姿である。てんや、も姿を消してしまつた現在、ただ一つの構口を復元して宿場歴史を秘めた貴重な文化財として、永久保存して頂きたい。ところが、何とも辛いな事に構口を何とかして、復元し保存しなければとの気運が擡頭し、日時と共に力強く盛り上がり、

本町 柴田由美子

れていて、西側に等しい様子に見えていた。このように両方の袖屏も見影もなく荒廃している。往時、この構口に高札が立てられ、高張提灯が立つて、左右に關守役人が居て通行手形等々を調べていた事等もあったが、今の姿か

柴田豊廣遺稿集より

平成30年度 子供恵比須頭

平成30年12月1日(土)、2日(日)に須賀神社にて9名の児童による平成30年度子ども恵比須頭が執り行われました。この祭りは、木屋瀬に江戸時代から伝わる由緒ある行事で、旧来は、男の子が数え年で11歳(現在の小学校4年生)になりますと、地域の若衆(大人)の仲間入りをする儀式として執り行われたものです。昔は、男の子もこの年頃になりますと奉公に出たり家業の手伝いをしたりして、子ども時代に入ることになります。武士社会では、「元服」として祝賀したそうですが、これに相当する町民方の行事だと思われ、現在では、毎年12月の第一、土曜日と日曜日の2日間に行われ、笹山車を作りそれに紅白の幕を張り、頭になった子供たちの名前を書いて町内を練り廻ります。



笹山車の巡行の他には、須賀神社に伝わる社宝(御幣、獅子頭)を奉持した神幸の行列が「とまれ」と練り廻ります。また、須賀神社で御座と呼ばれる神事を受け、その後、餅のこごり、大根のこごり等、定められた品々が並べられ祝儀の膳につきます。

11月中旬から太鼓・采振りの練習を始めましたが、最初は全くと言っていいほどできなかった子供たちが、柳勝二氏をはじめ青年会や地域の方々、前年度に頭を経験した子供たちの大変熱心な指導のもとで、連日太鼓・采振りの練習に励んだ結果、祭りの当日には、しっかりと太鼓・采振りを行うことができ、短期間でここまでできるものと、子供たちの成長に感心させられました。当日は、この時期としては暖かく、また晴天に恵まれた中で、多くの加勢人にご参加いただき笹山車を巡行することができました。その中で子供たちは、一致団結して、大きな声で元氣一杯に、練習で頑張った太鼓・采振りの成果を存分に発揮し、笹山車の巡行を楽しんでいました。一生に一度しかない木屋瀬の伝統行事を体験したことは、子供たちにとって生涯忘れられない故郷の思い出になったとともに、故郷を愛する気持ちやこの先の様々な困難も乗り越えられる力を育むことができたと思います。最後になりますが、この行事の準備から本番までご協力いただきました氏子総代会をはじめとする町内の皆様方、またご芳志をくださいました皆様方に平成30年度子供恵比須頭の関係者を代表いたしまして、心より厚く御礼を申し上げます。世話人代表 生島 克美

木屋瀬いろは歌留多大会 報告

1月6日(日)開催。毎年お正月恒例の「木屋瀬いろは歌留多大会」も回を重ね、今年も18回目となり総勢62名の方に参加していただきました。

- 子ども部と一般部(中学生以上)に分かれ、トーナメント方式で試合を行いました。会場は歌留多に集中する子どもたちの熱気に溢れ、札の取り合いが白熱していました。
- こやのせ座運営部会の方々の用意したぜんざいにも皆さんは舌鼓を打ち、喜んでいただけました。
- 【入賞者】
- 子ども部 (参加者 41名)
 - 優勝 藤田 美羽 (木屋瀬小学校5年生)
 - 準優勝 野津 瑠彩 (木屋瀬小学校5年生)
 - 第3位 藤田 美朔 (木屋瀬小学校2年生)
 - 第3位 池口 貴綱 (楠橋小学校5年生)
 - 一般部 (参加者 21名)
 - 優勝 木原 聖唯 (木屋瀬中学校2年生)
 - 準優勝 合屋 颯 (木屋瀬中学校2年生)
 - 第3位 小田 大翔 (木屋瀬中学校2年生)
 - 第3位 堀下 晃生 (木屋瀬中学校1年生)



第70回企画展「江利チエミ展」報告

みちの郷土史料館にて、第70回企画展「江利チエミ展」を開催しました。期間中来場者約100人と多くの方々に足をお運びいただきました。江利チエミや北九州音頭を通じて、昭和の時代に思いを馳せる展示をお楽しみいただけたものと思います。また、11月24日には梅井崇生さんによるミュージアムトークを行いました。地域の方々をはじめ、東京、大阪、広島など、遠方からの来場者も多く、関心の高さが窺えるイベントとなりました。皆さまのご来館、誠にありがとうございました。

こやのせ座 New Yearコンサート2019 報告

木屋瀬宿記念館では1月26日(土)、響ホール室内合奏団の方々をお迎えしてコンサートを行いました。「音楽と人々の暮らし」をテーマに、「昭和・平成」の音楽と人々の暮らしを振り返る「昭和・平成」というテーマで、わかりやすい説明と共に、お祭りマシーンや365日の紙飛行機、上を向いて歩こうなど、幅広い年齢の方々に楽しんでいただけたら幸いです。昭和・平成の名曲を披露していただきました。ヴァイオリン、チェロ、ピアノの演奏に、ボーカルの力強い歌声で会場内は大いに盛り上がりました。当日は雪が降りお足元の悪い中でしたが、来場者は約200名と大変多くの方にお越しいただき、ほぼ満席となりました。ご来場誠にありがとうございました。

